關西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話 (35) 2072
発行人 千神国夫
編集人 水上義博
（一部10）

古書全般売買
株式会社 天牛本店
南区道頓堀中座前
(21) 二七五八―九

大学における質の喪失

反動化する日本独占資本体制下における国家の文教政策は、反動的教育に執着するのみで何ら根本的に教育施設の改善に努力することもなく放置されたままである。現在の大学は、増大する学生に対して、そのままの設備で収容人員を増すのみであり、私学は、国家から何等援助をうけることもなく、そのしわよせを学生に負わせている。そして、国公立の門は狭く、私学の門は莫大な入学金と授業料によって、全ての国民に開放されているとはいえない。

こうして今や、学問の場は、ブルジョア階級の私物となりつつあり、質よりも量という傾向をもっている。

われわれ、二部勤労学生の立場は次第に無視されても不思議ではあるまい。今、新しく迎えた新生諸君に向って、心から歓迎し得るには何か、不足しすぎている。そこでわれわれは、われわれ自身の置かれている現実を鋭くみつめることによって、われわれの学園を反動的教育政策から守り、真に勤労学生のための学問の場を守りたいと思う。

二部の本質、無視

本年度入試の現状

大学志願者の年々増加する中で学問の広場はますます入口を小さくしている。大学進学率の増加と学生人口増加の傾向は、大学の門前で激しい競争を生み、学問それ自体の目的のずれたところで大学の存在がうんぬんされることになるのである。

ここでは、大学そのものの内容が問題になるのではなく、いかにして彼らを収容するか、それが大問題なのである。これで良いのか。現在の社会体制は大学出の資格がなければまともに生活出きない状態を造り出した。しかし国家はそれに見合うだけの教育設備の三分の一も作らず、受験生が門前にひしめき、私学は、その間隙をぬって彼らを貪欲にのみこみ、学問の場とはほど遠い状態で学生を大量生産して行くのである。しかも、この課程で、反動化する保守党内閣のもとでますます文教政策は中央集権化し、反動的教育を押し進めている。教育の場そのものは、全国民に開放されなければならないにもかかわらず、ブルジョア階級のみに許されるものになって行くのである。

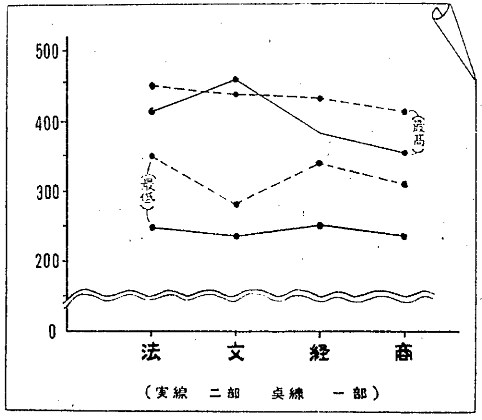
事実、国公立大学の門は著しく狭く、私学は、経済的自立を国家に要求されているため、年々学費の値上げを繰返している。一般国民にとっては、完全に経済的制約を受けて、能力はあっても大学の門をくぐることはできないのである。

こうした情勢の中で、経済的にめぐまれない者のために開かれている数少ない二部大学でさえも、その傾向を強めて行く一方である。特に私学の二部は、学校経営者にとって企業的意味あいでのみ意味のあるものに過ぎなくなりつつある。すなわち、学校施設と、教職員の回転率を良くするために二部を存在させ、その大学の評価そのものは、一部学生に託するのである。

本学においてもその傾向は否めない。学校関係者は、感覚的に二部勤労学生の労苦てい重に賞賛するのであるが、実質的に二部勤労学生の条件は満されているであろうか。

本年度の学費値上げは、実質的に高校卒と同時に本学に入学し、学生々活を送ることができないことを前提としたものである。

こうして、実質的に勤労学生が二部から締めだされ、一部の入試に合格しなかった者を二部に拾い集め、一段格を落したところでの授業が行なわれるという傾向をもってくるのである。



二月三日から七日までの間に行なわれた本年度の一次試験における一部と二部の成績は、別表のグラフのようになっている。ここで顕著にみられることは、最低点が二部の場合著しく低く、五百五十満点のうち、四学部平均二百三十点と四割強で合格している。しかも一次試験ですでに相当定員をオーバーしているにもかかわらず、このような形で採用されるということは、明らかに企業的な感覚が作用し、資よりも量という感じが強い。一部と比較したとき、学部によっては百点近くの差がみられる。そう上、二部のみは以前として二次試験を行なっており、定員数をはるかに上まわる水増が行なわれるのである。

こうして受け入れられた新入生に対して定員以上の教室、講堂での数百人もまとめてする講議が、疲れて学校へやってくる二部学生に取って、真に学問の場になり得るであろうか。それ以上に、教学において、ここ数年間、その改善にはみるべきものもないのである。なるほど現中谷学長就任時に教学の基礎を確立するということが前面にかかげて多少その意欲を示したにすぎず、二部に対して実質的には、何らそれらしい改善はされていないのである。具体的に語学力をつけるための方策、教科書の問題、ゼミにおける一部と二部の差の是正、その他、ほとんど根本的解決はみられないのである。

このような二部の現状は、あきらかに、二部軽視を示すものであり二部学部が勤労学生のためのものである前に、経営的要求からくるものであることを示すものであろう。

新しい学友を迎えた今、こうした私学のあり方に、根本的反省を求めるためにも、また、われわれ勤労学生に取って真の学問の場を作るために、そして、大学の門が、全国民に均しく開放されるために国家の反動的文教政策への徹底的批判と、学校関係者への反省をうながさなければなるまい。

学士六五三名巣立つ

3・20千里山で卒業式

本学の卒業式は、さる三月二十日千里山学舎特別講堂において午前十時より二回にわけて盛大におこなわれた。

二部の卒業生は昨年（七百八十九名）より少なく、六百五十三名である。しかし、追再試験の結果各学部とも若干卒業生がふえる見込みである。

卒業生の内わけは文学部八十四名法学部二百七十七名、経済学部百九十四名、商学部九十八名でそれぞれを代表して鰐渕忠行君、福若孫夫君、中島隆君、坂本文一郎君に卒業証書が授与された。つづいて、中谷学長の式辞、久井理事長の挨拶などがあり、卒業生は四年間の思い出を胸に、母校を巣立っていった。

なお学友会会長賞、教育後援会長賞は次の人々におくられた。

学友会会長賞
木原成人（文）久保正和（法）

教育後援会長賞
木原成人（文）久保正和（法）
島本直俊（商）高須勝次郎（法）
入江 学（法）畑中一己（経）
北岡淑男（法）上原義則（法）

有鄰館に生協販売所

生協の発足具体化

組合員募集はじまる

関大二部にも生協を創ろうとする動きは、昨年春の学生大会で可決後、生協設立準備委員会を組織し、その準備を進めていたが、いよいよ今月はじめから有隣館一階に生協販売所を設置、購売活動を開始した。同所では昨年生協準備委員会が二部学生を対象に実施したアンケートにより、二部学生が生協販売を要求した書籍、文房具、食料品薬品、化粧品、雑貨、タバコ、切手、DPE、クリーニングなどを販売、そのほか一部生協で扱っている商品については注文に応じて販売されることになっており、一応われわれが日常必要とする全製品が網羅される。

価格は近い将来二部学生が生協組合員になるという前提でここしばらく生協組合員価格（書籍は定価の五分引、他の商品は五割～一割引）で販売されるが、やがては組合員と非組合員の価格に分けられることになっている。

生協準備委員会では、新入生を迎え入れた四月以降、全学生に対して生協に関する認識を深めてもらうためのPR活動と、組合加入の募集を行ない、春の学生大会までにある程度の組合員を確保し、できればそこで一斉加入にまで持って行きたいと考えている模様。

さる三月二十九日に行なわれた昨年最後の生協準備委員会では、春季学生大会以降の活動の総括および新年度の活動計画の概要を検討、前年度学友会執行委員長木原成人君、現在代行執行委員長の小島秀明君（経四）の両名を交えて確認を得た。

そこでは①販売所を中心として学生への強力な情宣活動を展開し春季学生大会までに五百名の組合員獲得を目標に活動し②学生大会で全員加入案の上程を行ない通過すれば③生協天六支部設立大会をもって本格的な生協活動に加わる点を確認。一方、生協本部に対しては天六支部販売所の商品の点検や、二部が生協に正式加入した場合の組織などの定款改正の下地を作り、二部の利益が守られるように注意することなどが申し合わされた。

このように、生協運動は今年の二部学友会の重要な課題のひとつとして持ち越されたわけであるが、学生の生協に対する理解で積極的に加入し、一日も早く天六支部結成に持って行けるよう生協準備委員会では望んでいる。

解説

天六学舎に生協を作るための動きは三十七年にも学友会の活動の一環に持ち上ったのであるが、具体的な動きを見ないまま消滅したことがあり、その必要性は次第に学生間に高まりつつあったとき、本紙の生協キャンペーンを機に再び学友会活動の中に組み込まれることとなり、昨年春季学生大会で全員一致で可決、その後の生協準備委員会に全権をゆだねられて設置への運動を展開してきた。その学生大会での決議事項は、次第に圧迫してくる最近の経済事情の中で二部学生にとってぜひとも必要であるという根底に立ち、その方法論においては既存する一部関大生協の活動状況を正当と認めた上でこれの二部導入という線を打ちだし、活動を続けてきたもの。しかしそれの対大学当局との交渉が以外と手間どり、当初九月から設置の目標が今年の四月まで持ち越されることになった。大学当局は一部の関大生協が二部に導入された場合の大学側にとっての障害を憂いていたため、購売部を設置有隣館の管理の問題などを理由にその手続きを必要以上に遅らせた上、今回の設置においても有隣館を生協に「業者として入ってもらう」という立場をとり、いぜん二部の生協設立には協力的であるとはいえない。しかしわれわれ学生は、あくまで学生大会の決議およびその後の活動の中で一部の関大生協の二部導入の基本路線をくずさず今日に至っているものである。

委員長に中村君

第一回選挙管理委員会はさる三月二日開かれ中村伸昭君（経四）を委員長に以下つぎのように決定した。

副委員長 忠津恒男（商四）
〃 森川征孝（商三）
書記長 勝目敬朗（文四）
副書記長 由井靖彦（法三）
〃 首藤 隆（文三）
委員 高辻一起（法二）
〃 板倉 宏（経二）
〃 吉田純次（文二）
〃 滝井俊之（商二）
〃 高橋政治（経三）
〃 下 相泰（法四）

“勤労学生の誇り”を

学長 中谷敬寿

一九六五年の新学年にあたりここに多数の新入生諸君を本学に迎え得たことは、私のこの上もない喜びとするところであります。諸君はいまや本学の一員として、われわれとともに本学の将来を担うこととなったのであるが、長い勉学の努力が報いられ、入学試験の難関を突破して最高学府に学ぶことができるにいたった喜びと誇りは、おそらく言葉にはつくしえないものがありましょう。諸君の入学を心から祝福してやまない次第であります。

ところで、二部の学生諸君の大部分はすでに昼間それぞれの職務についており、従って時間的にも体力的にも種々の拘束や負担があるにもかかわらず、ここにさらに大学の課程にまで進まれたのであって、勤労と勉学とを両立せしめて今後四年間大学生活をおくるについては、なみなみならぬ努力を要することもちろんであります。この意味において、私は二部の学生諸君に対しては、かねて深い関心と敬意を抱いているものであります。

わが関西大学は明治十九年に夜間の関西法律学校として誕生して以来、発展の一途をたどって今日の大を成すに至り、本年はめでたい創立八十周年を迎えて盛り沢山な記念行事が予定されております。本学の沿革・歴史をふり返ってみると、本大学の今日の盛大さは夜間部に負うところ決して少くなく、二部の学生諸君は昼間の学生諸君に比べて何ら遜色なく、むしろ大きな誇りを持って然るべきである、と私は確信するものであります。どうか諸君は、学内における学習はもちろんのこと、時間的に厳しい制約のもとにおいても、またクラブ活動なりあるいは学友との交りなり、あるいは学外の活動なりにおいて、夫々常に二部学生たるの誇りを持って、充実した大学生活をおくるよう努力してほしいものであります。

論説

日韓会談に思う

日本の役割の再確認を

“日韓会談反対”と世論に訴え、世論を大きく反応させてきたこの会議もその裏に大きな不可解な問題を残して終局を迎えようとしている。いま、われわれは、日本と韓国との関係を、歴史的立場から、政策的立場から考えその会議が何を企図しているかを、明らかにしなければならない。

三十六年間にわたる侵略的植民地体制の古傷から生まれる、対日感情の根は深い。それは過去の苦い国民体験をもう一度くり返したくないとする朝鮮人民の対日警戒心である。両国の関係において国民感情としての“正常化”を必要とするのはこの点なのである。これはもちろん北鮮に対しても言えることである。

一九六〇年以降、韓国の世論を代弁し、大衆運動のイニシアチブをなしてきた学生運動は「反外国勢力」「反買弁資本」「民主主義、民族主義による南北の統一」という三つのことばの前では、すぐさまにでも、完全な一つの行動を起すことができる。そしてこのことばは、知識層はもちろん一般市民階層の共感をもとらえるという。

現在、わが国の政府が朴政権とともに推行しようとする日韓会談は、この点において、現実の両国の世論と大きな矛盾を示している。

政府は日韓会談は、両国の関係を「正常化」するためのものだとのべている。正しい意味における、正常化は朝鮮半島の危機を現在以上に深刻化させないようにする努力と同時に、これを解消する努力である。南北朝鮮間の対立激化をやわらげ、双方、みよりを計る方法をさがし出すへ、国交正常化を目指す方向、か国がその継続となって、朝鮮半島統一へ努力することが正常なる善隣関係の樹立するところである。しかし当面の国際情勢からして、この方法がいま可能性がまったくないというのなれば、少くとも現在の国際情勢が好転するまで、すなわち、米中間の根本的な関係が、調整されるまで交渉を打ち切り、そういう情勢樹立に努力すべきだろう。

現実に、ベトナムの戦火の拡大が前面にでているのは事実であり、この問題に対処しようとする動きは各方面にもあらわれている。根本的にいえることは、アメリカが侵略をやめて話し合いによらなければこの問題は解決しないという事実である。

いまアジア情勢の中で、ゆれ動く二つの極のベトナム、朝鮮半島の根本的な共通点は、民族の分裂とアメリカの帝国主義支配下にあるという悲劇である。この悲劇が第二次世界大戦後の米ソの冷戦に始まり、これが激化するとともに造られてきた東西の陣営を仕切る最前線が一つの民族を分断している点であり、それが国際化すればするほど民族統一の運動はその障害を大きくし、反比例的に統一実現の可能性は減少するのである。すなわちベトナムの問題にしろ、朝鮮の問題にしろ、それはアメリカの政策そのものに密接性をもち、アメリカのその国からの撤去のみが、その問題の正常化に帰し、その問題の解決なのである。すなわちそれによって、アジア政局の安定、平和は獲得されるのである。

日韓条約は日米安保条約を基礎とする日米における米国のいま朝鮮に行なっている軍事援助の片がわりをいみし日本の支配をいみする。そのような事態の中で日韓会談のはたす役割は、その根源に侵略とおしつけのある限り真の民族統一は不可能といわねばならぬ分裂した民族の再統一というものが完成されるまでは、それぞれの民族の内部緊張は持続し、その緊張エネルギーが直ちに東西間の対立もしくは衝突に直結し、国際化される要素を多分に含有している。

この要素が実現した代表的な例が朝鮮半島の例でありベトナムの例なのである。

日韓会談は、日本政府により従来から主張されてきた（1）日韓基本関係の樹立（2）財産請求権の処理（3）漁業問題の解決（4）在日朝鮮人の法的地位の四主要問題の解決の方式をとり表面上は両国間の善隣関係に努力のようであるがしかし、それは日本の反共体制の強化であり、その基礎は日米安保条約によるアメリカの一連の中国政策の一環である。アジア政局のすべてか、中国、アメリカにその根本を帰するといっても、あえて過言とはいえぬであろう。

日韓交渉の成立は、もし三十八度線で再び戦火が上った場合、日本はかっての朝鮮動乱の時のように、対岸の火災といったわけにはいくまい。戦火の渦中にまきこまれるのは当然であるという見方が成り立つ。これはもちろん三十八度線のみならず十七度線（ベトナム戦線）の場合にも、日韓交渉は日本をこれまでのような他人視できない立場に追い込むことは、必然である。ベトナム、台湾、朝鮮半島と結ばれるアジアの地図の上に画かれた線は、日本の平和を動揺させアジア情勢を、世界の情勢を危機に陥し入れるに十分な危険性を増大してきたといわねばなるまい。

今日、日本が朝鮮国民に対して、すべてのものに優先して行なわねばならないのは、今日終局を迎えようとしている南北の固定化をはかる日韓会談の結論ではなく、朝鮮の統一と緊張緩和のための南北の経済、文化等の交流特に韓国においては六十万に及ぶ軍隊の維持費の削減が可能となるような国際的諸条件を整えることに寄与することなのである。真の関係は、日本と朝鮮の両民族の真の和解の方向でなければならない。

この主旨により、われわれは、アジアの安定とわが国の平和のために一刻も早く「日韓会談阻止」のための行動を起し、全国的なものとして、また国際的なものにまで拡大した闘いを組織し、取り組む必要にせまられている。

監査委員会開く

委員長に瀬戸口君

第一回監査委員会は、さる三月十九日開かれ、委員長に瀬戸口忠義君（経三）を選出以下つぎのように決定した。

副委員長 高木健一（文四）
委員 佐伯勝雄（文三）
〃 後藤 登（法四）
〃 朴 忠弘（経三）

代行に小島君を

会則問題で意見対立

自治委員会で

さる三月一日午後七時すぎから、代行執行委員長などを決める三九年度最後の自治委員会が会議室で行われた。

委員会は代行執行委員長選挙に関して最初から、学友会々則に代行委員長の条文がないところから意見が対立した。会則はあくまで議決が原則となるものであるからそれに従って進めようとする自治委員とこれまでの慣習に従って代行委員長をおこうとする自治委員に分かれ、激しい意見の交換が行なわれた最終的には、会則に従うか、慣習に従うか、採決がとられ、これまで通り代行委員長を置くことを決定、選挙に入り、小島秀明君（経四）が竹村君（法四）をしりぞけて代行委員長に選出された。

その後、議長発熱を理由により退場し木原前執行委員長を議長にして、選挙管理委員の選出に入った。ここでも、学友会選挙管理委員会会則第二条の規定事項に関してまた意見が対立した。代行委員長選挙の時と同様に会則に従って選挙管理委員会の組織を主張する自治委員は全員退場し、会場は一時混乱した。

その後、委任状により成立した同委員会は、十二名の選挙管理委員を選出し十一時すぎ閉会した。

新代行執行委員長小島秀明君談

木原前執行委員長の方針にそっていきたい。昨年の大きな問題であった授業料闘争に関しては、闘争委員の皆さんにはいろいろ御苦労なことであったが誠に遺憾なことであるがわれわれの最低の願いも大学という大きなものの前にふみにじられ非常に残念に思う。生協の問題に関しては、今から始まることなので私の代には何んとか基礎造りをやっておきたい。

解説 この自治委員会では、学友会会則に即っとり行なうという非常に簡単な法以前の社会ルールすらも無視されたのである。今後の学友会自治の原則もこのような次元で推行されるならば、学生との遊離及び学生自治というものが不明確になることは明らかである。

しかし会則に代行委員長をおくことが名記されていないとしても執行委員長なり、執行部なりにかわる別の組織がなかったなら学友会活動はとだえる。その意味で卒業しない執行部誕生までイニシアチブをとるのは当然だ。なお今の会則では選管選出の根拠も自治委員会にない。このように会則に不備な点があることは以前からいわれていたが、不備だから無視してもよいことにはならず、不備を正する方向で解決がのぞまれる。

記者の眼

エスカレーションの恐怖

ベトナムに解決を

世界。人類がまた平和を求めてあえいでいる。この平和への願いを踏みにじるものは人間としての価値を放棄する者といえよう。

◎……朝鮮戦争での危機、キューバでの危機、そしていま第二の朝鮮戦争、第二のキューバ危機と、世界を脅やかしているベトナム。世界は危機に立つ時ほど平和という観念に陶酔する時はない。

◎マスコミが拡大する以上に戦争武器は改良、発展し地球の裏側での事件が当事国はもちろん、世界人類の注目を浴びざるを得ない。人間がその時ほど科学に対する憎悪を感じざるを得ない時はなかろう。人間の不幸だ！

◎…そもそも原因はアメリカの帝国主義政策が世界人類を不安に陥し入れている。フランスの支配、日本の支配、フランスの支配、アメリカの支配と永年、外国人の圧迫を受けてきたベトナム民族が民族解放に立ち上がったのは当然の起こりであった。これをかいらい南ベトナム政府とアメリカはベトナム共産党（ベトコン）の侵略行為であると宣伝して圧迫にのり出したのである。このようなアメリカの南ベトナム侵略を南ベトナムの民主主義確立だといったところで耳を立てる者がいるとしたら事実を認識していない者であろう。

◎…アメリカの南ベトナム侵略の目的な中国封じ込め政策の一環であるが、毎日北ベトナム爆撃を続ける目的はどこにあるのだろうか？新聞によくみるエスカレーションという言葉。まさか絞死刑であるまいし、たどり着くところは、世界人類が恐れている第二の朝鮮戦争であり、第三次世界戦争である。パマール爆弾、毒ガス使用とアメリカ帝国主義の露骨な、残酷な侵略行為は世界人類の平和の願いをしり目に続き、中国参戦はアメリカのエスカレーション政策の望むところであろうが、もう時間問題であろうといわれており人類が最も恐れているのはこれである。

◎…佐藤政府はベトナム問題ではアメリカ帝国主義の侵略行為を正当ずけるのに一役を買う有様。同じアジア民族の苦悩、民族解放にわれわれは援助の手を指し述べるのが常識であり、平和を願う国民の希望である。そうすることが日本の過去の過失の償いであり、かつアジアの民族の責務であるまいか。

学声春秋

▼新入生、S君への手紙▼ご入学おめでとう。まずは君の難関突破をされて今日あることを、心からお祝い申しあげたい。君は今日から、「大学生」であると同時に「一社会人」として出発したわけだから、諸君の前に提起されている問題は学内外を問わず余りにも多いのだ。それらの解決への諸君の努力が、諸君が今まで抱きつづけてきた理想の樹立に他ならないのではないか、と思うのである。▼まずわれわれは疑問を持つことから始めよう。諸君が目ざし、努力を重ねて入学した大学が、いったいこれでいいものだろうか、と。諸君の授業料は現在の四年次生より一万六千円高く、二、三年次前より二万千円も高いのである。この大巾な値上げは単に世間的な物価上がりムードによるためでなく、見てくればかりの関大経営者の無能力さによるのだ▼また、教学の内容はこれでよいか。二、三百人をも一堂に集めてまるで演説会のようなマス・プロ教育。立派な社会人を形成するための大学として、それは余りにもおかしくないか▼さらにわれわれ社会人が構成する一般社会の問題、値上げ、低賃金公害、交通事故、一台億円もするジェット機、汚職、そして貧民それらはなぜ起りうるのだろうか▼加えて、米国のあの狂気じみたベトナム攻撃、それに涙をのんで堪えつづける人民の姿、悲しい中ソの現実、米国の人種問題、日韓会談、ETC…。▼さあS君、君が大学の中で果さなければならない役割りはもういうにおよばない。君とやがて作る何人かの友人たちが、関大二部学生を形成しているのだという認識。真に有意義な大学生活はこの認識の上に立ってスタートされなければならないのだと思う。▼君は誰かがよく「大学は遊んでくらせる」なんていったのを気にしてはならない。たしかに、勉強しなくとも卒業しようと思えばできるのが現状のシステムの中にはある。だが、しかし、いかに上手く遊んで卒業したとしても、米に君の将何が残るというのだろう。卒業証書。それだけだ。それだけで良いというのも、また現実の姿かも知れない。しかしわれわれはその風潮を破ってやろうではないか。四年後に「おれは大学を卒業した」という確証を本当に自分のものにしたいと思うからである。S君、がんばってほしい。（春秋子）

関西大学生活協同組合　祝御入学　関西大学理事会

“みんなの生活（くらし）を
みんなで守る”

関西大学生活協同組合

天六購買部開設

教科書　食品
新学期用品　ライター・時計
文房具　クリーニング
衣料雑貨　DPE

すべて市価の二、三割引!!
組合員価格にて提供

有隣館一階 PM五―八時
関西大学生活協同組合天六購買部

理事長 久井忠雄
学長理事 中谷敬寿
理事 上道真夫
植田重正
〃 岡野衛士
〃 中石清一
〃 西村治三郎
〃 西本寛一
〃 藤田友次郎
〃 松原藤由
監事 長柄金吾
〃 梅原貞治郎
〃 小寺寛
評議委員会議長 樫本信雄
〃 副議長 今井康兼
関西大学理事会一同

学生自治は存在するか

＝学友会活動の現状＝

学生不在の欠陥

必要な根本的解決

40年度の展望

学内では、授業料が値上げされた。学外では公共料金の値上げが。また国家独占による大学支配、産学協同体制にみる大学の企業化、マスプロ教育の推進勤労学生に与えられた現実はあまりにも厳しすぎるろか、われわれは勤労学生の自覚の上にたって現実を打解しなければならぬ。その意味で学生自治活動の意義は大きいものがあろう。

はじめに

今年度も千余名の新入生を迎え学友会は新らたな活動を展開しようとしている。毎年この過渡期を迎えるがここ数年はその本質的意味は薄れてしまい、ただマンネリ化した学友会と存在不明な活動のなかで、事務的な引き継ぎだけが一定の形式に従って繰りかえされている。このようにマンネリ化した組織体制から離れて、もとの組織に目を当て分析してみる必要がこの過渡期にぜひ必要である。そうでなければ、これで叫ばれてきた学生不在の学友会という嘆きは無責任な言葉としての意味に終りその本質的な前進、発展はほとんど望めないだろう。その主旨において、三十九年度学友会活動をふりかえり、四十年度の学友会活動の方向を探り出してみたい。

パートの私物化

三十九年学友会活動はパート連合の上に組織されたといっても過言であるまい。例年パートの利害関係の衝突を見る自治委員選挙がこの年は六パートの申し合わせにより選挙することなく、無投票当選で自治委員の大半を選ぶという形をとった。その結果として学友会活動の基盤となるべき自治委員が各パートの私物化的、つまり秘宝物的存在となり最終的に学友会そのものがパートの私物化的存在となるのは当然の結論であった。それでも前々年の二パートによる学友会執行部独占に比べて、パート間の衝突をなくし、パート連合を確立したことは本質的に何んの違いもないとしても一応指摘してよい。

ところでこの学友会の有り方に批判の目を向ける常識ある学生が何人かいたが、結局は一時的な批判にのみ終って、学友会の民主化運動となるまでには強固な壁を感じた。そして改善の方法がないまままた力量不足のまま放置されたのである。

その理由をあげるなら各パートの活動の学友会依存の度合が非常に大きく、自治委員なり、パート所属者がその立場に立つことは学友会から見放されることになり、ひいてはパートにとって致命的結果をもたらすことは明らかであるからだ。なぜなら自治委員の数が常に学友会活動、及び予算に比例的であり、パート活動それ自身が学友会予算に大きく左右されるからである。だから自治委員はパート代表的性格をますます露骨にあらわし学友会の民主化を窮地に追い込んでいる。

このような本質を踏えて学友会は活動を開始したが、自己の本質的欠陥を指適することを恐れるあまり、生協設立準備委員会、会則改正準備委員会など裏面的な問題をとり上げ形を整え、学生自治そのものの位置づけを放棄した。そして二つの準備委員会もこの本質的問題をさけたため、全学生の要求として取り上げられず、活動そのものの展開がなく崩れ去った。ただ生協問題は一部生協との連携の上で今後活動を展開する余地を残した。

このパート私物的な学友会がそのものの本質を暴露したのは春の学生大会での学友会費の値上げ決議である。議案書に掲載されていないこの議題を学生の大半が帰った十一時過ぎに提案し、ほとんどクラブ所属者だけで強固採択した。これは後ほど会則上の不備ということで無効とされたが、全学生の利害を大きく左右することが、このように一部の学生によって陰で行なわれていることは非常に大きな問題である。

本来学生不在の学友会活動というものはありえない。また全学生の参加による学生自治のなかで、一つの方向に運動を展開することは絶対に必要なことだが、容易なことではない。ところが前述のように、本質的欠陥により、学友会はこの学生自治の本質について考えることする放棄してしまった。それは昨年十一月に起った暴力事件の時、露骨に暴露した。大学の次元における暴力行為が続発することは、もはや学生自治以前の問題である。学問研究の場であることは、学生自身の手で自分たちの自治を行ない、より高度な政治的素養を養うと同時に自治意識を高めることである。この大学における本質的原則にもとずいてこの事件をみる時、発生したことが明らかな誤りであった。それにもかかわらず、この暴力行為に対する学友会の対処は見るべきものがなかった。二回目の事件には執行委員長自ら一枚加わっており、事実の隠ぺいに奔走する始末であった。そして体育会の自発的な無期活動停止を学友会の処分とすると告示し、それで問題を解決しようとしたのである。その上事件の半月後にようやく開いた自治委員会では教授会の処分が厳し過ぎるから軽くしてもらうよう嘆願書を決議しただけで、学友会での暴力事件は過去の一つの事実を残すだけで学内に暴力が横行する現実の解決策はすべての自治委員が目をつむんでしまったのである。

このような中で行なわれた授業料値上げ反対闘争はその闘争自体学生の中に入りやすい要素はあったとしても、徹夜団交数回を含む八回におよぶ団交を重ね、臨時学生大会では三六教室がほぼ満員になるほどの盛り上がりをみせたのは数少ないにせよ闘争委員によるクラス討議、積極的な学生への呼びかけがあったためであろう。それも初期の闘争目標である「授業料値上げ白紙撤回」を勝ち得ないまま沈滞してしまったが、学生の要求を学生の中で闘った昨年度の学友会活動の唯一の運動であることを評価しなければならない。また学友会沈滞の原因が執行部自体の消極性と無責任な活動でしかないことを学費闘争の成果から引き出すことは困難ではなかろう。

自治組織の確立を

こうして昨年の学友会活動を総括してみた時、大学という時点で評価できるもので決してなかった。一部分のパートが全学生の学友会執行部を私物化することによって学生を実質的に排除し、運動としての前進はおろか、その形体を整えようどする意図すら見られなかった。われわれは現に存在する以上、このような現状をただ現状として見捨ててしまったのでは今後の活動の基盤を失うことになる。最初に述べたごとくこの現状分析の基盤上に立って、正しい学友会活動の方向づけをすることにより、現状の脱皮をはからなければならない。そうすることが現時点におけるわれわれの使命であろう。

つぎに勤労学生のおかれている現状を分析してみよう。以前の大学管理法案にみられるごとく、国家独占による大学支配がはっきり打ち出され、また産業技術教育の振興法に基く産学協同体制の確立は、大学を一定の人間像の大量生産を企業化し、大学本来の学問研究の場はいまや骨抜き状態となりつつある。大学の存在意義が危機にひんしている時、また私学においては経営合理化の陰にかくれて建物、土地に莫大な経費をつぎ込み、そのしわよせを授業料の大幅な値上げでおぎなおうとしている。ここでは憲法に保障された「教育の機会の均等」は経済的な面で脅やかされ、大学は一定の階級のみに平等である。またマスプロ教育の推進など、学生に対する威圧は度を増すばかりである。このように勤労学生に対する各方面からの威圧、圧迫はますます激しくなり、その中で勤労学生として社会的、学内的な自治活動の役割は大きいものがあろう。ここに至って、われわれは学生自治の確立のなかにその役割の一端を考えなければならない。学生自治組織の中で、これらの問題の解決方向が見いだされるのであり、また効力が生じるのである。ところが三九年度の総括で述べたように学友会は組織形体そのものが明確でないばかりか、自治組織の確立を大きく妨げているパートの学友会私物化が見られる。確かに勤労学生の本質的なものとして時間のハンディキャップはどうしようもない事実として存在し、学友会活動がパート所属者に限ぎられがちであることは否定できないのである。ところが前述のように、自治委員ならびにパートの活動者は学友会活動の本来のあり方、学生自治組織の確立に対する考え方の甘さとそれ以上にパートが存在して学友会が存在するという観念からぬけ出ていなかったのである。このような現状の解決策であるが自己防衛の手段をしらない無知、無組織の学友会を平原の真中に置いたのではもちろん飢え死にをまつばかりである。だからここで学生自治組織確立の解決策として考えられるのは、現状を基礎にした解決策、学友会活動者の自覚ある態度、パート活動者の自覚である。そして学生自治組織確立の中で学友会活動者がその中から盛り上ってくると同時に、自治委員などの活動者もパートのカラーから脱して自治組織の中に身を投入することによってこそ学生自治組織確立の本来の目的に達するのである。そのなかで勤労学生が現在直面している社会的な問題、学内問題などに対称していくべきであろう。

このような意味において、今年もまた自治委員選挙期を迎えたが、学生自身、現状の学友会組織形体及び本来の学生自治組織確立の認識を自己の内面に確立すると同様にパートの活動者をはじめ学友会活動者も充分これらを認識した上で、学生としての意識を自覚し、学友会の前進をはかる観点に立って自治委員選挙にのぞむべきであろう。

生協設立を具体化

最後に学友会民主化の組織確立と同様に四十年度の学友会活動の当面の課題を探ってみよう。物価の値上りで経済生活に非常な圧迫をしいられている勤労学生に対し、本学においては大幅な授業料値上げが行なわれ、勤労学生の経済生活は破たんを来すところまでいっている。このような中で勤労学生が団結してお互の生活を守り国家独占資本と闘っていく主旨において、生協の設立運動の必要性が叫ばれ、その内容が具体化しようとしている。われわれは勤労学生としての経済生活を守る意味から、また勤労学生に対する社会的な圧迫を連帯意識のもとに団結して排除する主旨においても生協設立運動を成功させなければならない。

第二に昨年度最終自治委員会で混乱をまねいたように、現在の学友会々則はおせじにも整備され、大系化しているとはいえない。そして、現実の活動面では会則の無視した行動が多くとられている。そして、その既成事実は慣行として、会則以上の拘束力で学友会活動を規定しており、そのものが正しいのような主張がなされているしかしそれは日和見主義だと批判されても当然であろう。なぜなら学友会活動の目的を明確にし、それに準じた組織内容なり、活動形式を定めたのが会則であるから、一時的便宜手段としてそのつど組織や活動形体をかえたのでは、本来の目的とはほど遠いものとなろう。過去のあやまちもここに一端があったのである。確かに時代の流れに沿わない会則の条文がある。だからそれを現在はあいまいな規定だとして無視するのでなく、全体的な観点にたって整備して、学友会活動の円滑化をはかるべきである。

論が学内問題に集中した感があるが、勤労学生は労働者としての立場を絶対に放棄できない。学内自治組織確立の中でまた社会的なあらゆる問題に対処しなければならない。そしてそれらは学友会の活動の課題としてとり上げられるべきだろう。

× × ×

授業料闘争をふり返って

二部闘争限界を拡大

今後の闘争に新基盤

私学の偏向化

昨年の私学における学費値上げは慶応大学の反対闘争をピークに全国的な規模で行なわれた。池田内閣の経済政策の失敗は、中小企業の倒産続出、公共料金の値上げにともない諸物価の暴騰を生起させただけで、遂には、国民不在の内閣として倒壊やむなきに至った。こうした経済的不安定の中で、全国大学の約七割強をしめる私学は経済的に行きづまり、同時に学生の増大という状態の中で、必然的にでたらめな値上げを行なった。そこに、反動的自民党内閣の反国民的文教政策のひずみを赤裸々にせずにはおれなかったのである。実に全国学生人口の三割をも収容し得ない国公立大学を前提としながらなおも、私学による認識不足が長期文教政策を作るにも致らないまま放置されていたという以外になかろう。

こうした中で、大多数の私学在学生は、宿命的な生活防衛闘争を組んできていた。しかし、この闘いは、例に増して昨年は激しく戦われた事実は一体何を意味しているのであろうか。いうまでもない社会的教育の場であるはずの私学が次第に経済的圧迫により一般国民を私学から追い、ブルジョワ化しているということである。

この状態は、本学においても何らかわるところはなかった。そして、われわれ自身、この企業的設備投資に狂奔する理事会との激しい対決を見たのである。全国的な例にもれず本学部における学費闘争も例年に増して激しかった。その意味において、いまだ結論を見るに至ってないとしても確実にその意義は認められると思う。

支持を得た運動

少なくとも初期段階において過去の学費闘争の経験は生かされ、全学生の闘争を指向していたことは多くの者の認めるところであろう。それは、昨年十月十二日に行なわれた第一回学費値上げ反対臨時学生大会に集約される。この段階では、全学生の闘う姿勢が確認されたし対理事会攻勢も、完全に学生側のペースであった。この段階においては、学友会そのものにではなく学費値上げ反対闘争委員会のイニシアチブのもとに、各パートは、「われわれの生活と権利を守る」意識を十二分にもっていた。

しかし十一月を過ぎる頃から闘争はますます長期化する構えをみせ、追いつめられた理事会は、学生部を通じての側面的反攻に移ってきたと言える。そして学生部はその主体性の確立を自から放棄することによって、理事会に従属し反学生的行動をのぞかせるに至った。しかしこの事は、まじめに、学生の生活を守るために闘おうとする学生に対してはむしろ、闘う決心を強めさせたにすぎなかったのであるが、一部学友会関係者の間では動ようする者があらわれた。そしてこの思想的奇型児は、十二月十一日の第二回学生大会において自己破産を来し、大会放棄を呼びかけに至るのである。しかもこの大会において期待された全学授業放棄のためのスト権は大多数の学生の指示を受けながら決定できず以後の活動に大きな割れ目を作ってしまった。

闘争委自体、この大会の失敗で動ようをかくすことができなかったようだ。しかもこのころから闘争委の疲れはしだいに目立ち、これまで無関心に授業料闘争を傍観していた学友会執行部の介入が目立ってきた。

問題点を明確に

結局、十二月中に解決されなければならなかった闘争は正月休暇を迎え、遂に進退きわまった状態で自然に冷却へと向った。

正月明けと、学期末試験という時期的不利は、二部における闘争の限界をむなしく浮きあからさまにした。こうした時、闘争委内部では前半全く闘争を避けていた副委員長の出現、それに続く分派行動、がきわだって闘争委の統一を困難にし、彼を中心にした二、三名の委員の現実離脱的方法論がブンブン音を立てて空転しだすのである。

ここまでの闘争の経過の中で考えられた問題点は、多く闘争後期にみることができる。

では何が問題点として解決されず、何が失敗であったろうか。原因、その他については十二分に考えられなければならないし、今後の闘争のためにも残されなければならない。

そこでまず第一に闘争委のだした戦術的方法は、学生の支払能力の限界を学費の社会的妥当性であった。もちろん、これは学費問題の前提であるから最も有効なものである。しかしその他の攻撃方法は全く統一されず、ほとんど指摘されなかった。これは闘争委自体の研究不足と理論的視野の狭少さを解決されなかったことを示したものではなかろうか。なるほど、技術的には一つの問題で統一され大衆化された。そして団交そのものも、有隣館を使用したことは有効であった。全く学友会と学生の離反した中で、あれまで学生を運動の中に引き込めたことは大きな成果である。

ハンストの欠陥

また、各パート間の最後的分裂が常に起っていながら過去の闘争に比して比較的統一を残していたことは闘争委の指導力を評価できようしかし、闘争の疲れがめだった十月後期において行なわれた、ハンストは明らかに、学生自体を消耗させただけであった。事実闘争委内部で大きく意見の対立があったようである。もし、この時期で、十二分な現状分析があれば、このハンストを中止させ他の有効な闘争手段を選択できたはずではなかろうか。明らかにこの誤りは、ハンスト以後、闘争のイニシアティブが理事会へ移って行った事実からみてうなずけるのである。ここに、この闘争の行動力を示すことはできても全体的に理論的根拠の弱さをみるのである。

われわれは、この学費闘争が何ら結論をみていない現在、やはり継続しているものと信ずる。理事会の一方的実施を阻止する闘いを新しい、明確な立場でもって再度燃焼させてもらいたい。このためにも闘争の理論的方法の確立と、より大衆化された段階での闘いを組まなければなるまい。しかもその場合、もはや反学生グループとの妥協は許されるべきではなかろう。

また、この闘争の前半にみられた活動の基盤をもとに、問題を大衆化する方向で運動を展開し、これまでのいろいろな運動の中で指摘された問題点を克服しなければなるまい。そうしてこそこの闘争の運動自体の成功に近ずくことになるまいか。

映画評

厳しい人種差別の偏見

＜わかれ道＞

愛の幸せを踏みにじるもの

米国の黒人問題は民主主義を自称する自由世界の指導的国家の断面として、実にみにくい形で存在している。世界中の知識人が、その前近代的偏見をもつ国民を不思議な面持でながめるのもむりはない。時には、ぶつぶつにただれた局部からふき出るうみのように社会に流れ出て、悪臭とみにくさを残すのである。

米国の政府自体、その局所に根本的な治療の手をのべることができないのである。

しかし、この国の良心ある人々は、これを改善しようとし、社会的勇気をふるって何度も問題提起がなされている。しかし依然として南部諸州におけるこの人種偏見は容易にぬぐいさられるものではなさそうである。

こうした人種偏見は、すでに、南部人にとっては、生活のドス黒しみとなって日常の生活に浸透している。そして多くのアメリカ人たちは、自分たちの恥部に目をつむり、しいておおいかくそうとするのである。

この米国の人種問題を、愛とその愛への政治の介入ということを通して、巨大な社会に圧しつぶされる人間愛の限界と、現実の背定ということで大衆に呼びかけてくる。

野心家で自分勝手な夫に捨てられて娘エレンと二人だけでほそぼそと生活していたジュリーは同じ会社の黒人の事務員フランクと次第に愛し合うようになり、みんなの反対をおして結婚する。そして二人の間に子供を作り、フランクの両親をふくめた一家は、平和な満ちたりた生活を送っている。そこへ、前夫ジョーカレンが帰ってくる。そしてジョーカレンは娘エレンを取り返すために、訴えを起すのである。判決は、彼ら夫婦の理想的家庭を認めながらもジョーカレンに、エレン引渡す。

ここに、米国における人間の幸福は白人のみにあって黒人には許されないという社会的現実をはきだすようなやり方で語りかける。このごくありふれた小市民の日常的生活にさえ社会的偏見は、人間としての幸福を追求する権利さえも許さないのである。しかも、それは法の名において考えされているということを認めざるをえない製作者の苦しみがうかがえる。

特に感情的に強く訴えてくるのは、何か日本的な「母もの」といった俗っぽさもあるが、地味な画面構成と、入念な演技力は、それ以上に、まじめな感動を与える。この意味で成功した作品であると思うが単に事実を事実とするだけでなくもう一歩積極的な批判がシナリオに欲しかった。

それにしても、最近の商業主義的作品ばかりの時に、こうしたまじめな、深い感動を呼びおこす作品は、きぜわしいわれわれの生活に何かを与えてくれるだろう。その意味で、もし君の気の強いガールフレンドの涙を一度もみたことがないのなら、是非二人で行き給え。健全な涙を受け合ってもいい。

原題(ONE POTATO.TWO POTATO)

東和提供／アメリカ・バワルコ、プロ作品

人間像の真実？

せんじつ、中央教育審議会とやらが何を思ったのか「期待される人間像」なるものを発表、以来これがひとつのはやりとなったのか「なんとか像」としきりにもてはやされている。ところでこの「期待される人間像」の中に「法的秩序を守りつつ漸進的に、大衆の幸福を樹立」とヌイ文でうたっている。実際、それは誰れもが願っているのですがね。だが現実はきびしすぎるほどキビシイもの。幸福が天から与えられることは「宝くじ」に当ることよりまれであり、自分で創りだしたものこそ本モノだろう。その幸福なるもの、どこから生れるのか。まあ、現状の社会において、安易な現状肯定をもっては、進歩は望めないし、真の幸福なるものも生れないことは明らかなようだ。

あの自由民権運動の板垣さんも当時、世間では狂人とののしられ、多くの迫害をうけたが、彼は死の直前まで自由民権を絶叫したといわれている。そこには彼の自由への信念と勇気があったからにちがいない。われわれは運命に柔順でなければならない。しかし場合によってはそれにさからうことも必要なことだ。過去にもあったことだが政府自身が道徳を説教するようになったときの危険は、にがい経験ずみだ。「期待される人間像」確かに結構なことだが、それが何か誤った方向に進まれるように思われるのは、わたくし一人だろうか。（Ｉ）

40年度新入社員募集
報道部記者
編集部記者
地下、関西大学新報社

教授

金戸嘉七（かねどかひち）

新聞学担当

くつろがれる金戸教授

近鉄電車をあやめ池で降り、五分間歩くと、池と松林を配置した幽玄境の中に、金戸嘉七先生のお宅がある。門前に立った記者は目だたない、地味な二階建の家が、すぐ近くまで進出してきたきらびやかな新興住宅との対比の中で、先生が俳句を親しまれることをとっさに思い出していた。

記者は気軽るに迎えてくださった先生と奥様に、一つの部屋に招じ入れられた。一方の壁一面がぎっしり詰まった書冊になっており、他方が庭に面している。お茶をご馳走になりながら、私たち新報社の顧問でもあられる先生との話は、ポンポンと弾んでいった。

金戸先生が本学で教鞭を取られるようになってから約十二年過去三十年間の毎日新聞社における経験が、本学新聞学科の成長に尽されたところは実に大きいだろう。毎日時代に整理部長の要職にあり「整理の神様」とまでいわれていた先生は、その判断力のすばらしさから、時として飛び出す辛辣な批判が、私たちを怖れさすことがある。学生に対しても、また記者たちが作る新報に対しても、謙虚に聞き是正しようとする態度、私たちにそれが必要だと改めて知ったのである。

円熟した人間味

信念通すシンの強さ

近く社会学部に発展しようとしている新聞学科も、先生が本学に来られたころには学生も非常に少なかった。冬のストーブもない寒い教室を抜け出て学生たちと一杯やりながら講議？したことなど、昔話をなさる先生は楽しそうだ。そして、マス化した現在の授業を与えられる学生たちを憂いながらも、同時にその中に妥協せず勉学しようとする厳しい心構えこそ必要だと強調される。

先生は多忙だ。講議は週に二日ほかに永年来の本学就職部長であり、シーズンになればあちこちの会社との交渉に走り回られることになる。この影武者的なご苦労にわれわれ学生が受ける恩恵は大なものがある。

「先生の人生観を…」だいぶしてから記者のひとりが何かを期待するように聞いた。先生は「人生観？　そんなものはないですなー」と例の高らかな笑い声をおいて「まあ、何事にもくよくよせずに、のん気にその日その日を送ってきましたから」

私たちは、ほとんど白くなった頭の、円熟したひとりの人間を見たと思った。

私たちは先生との記念撮影のため庭に降りた。静かだ。例年より少し遅いといわれる梅の花が、清楚な花びらをふるわせている。その時、どこかで鶯が鳴いた「ほう、鳴いてますな」と先生はしばらく目を細めてその声の方をながめられる。

学内告知板

▼**法文経商事務室**

行事予定について

四月五日　法文四年生履修届提出
六日　法文三年生履修届提出
七日　法文二年生履修届提出
〃　経商四年生　〃
九日　経商三年生　〃
十日　経商二年生　〃
◎受付時間自十七時～至十九時
四月八日　十七時より天六学舎で入学式
四月十三日　授業開始

▼**第二学生課**

昭和四十年度春季健康診断実施。

一、受診日
四月十四日　法文一年次生
十五日　経商一年次生
十六日　全二年次生
十七日　全三年次生
十九日　全四年次生
二十日　全未受診者
二十七日　全女子学生
二十八日　全女子学生
二、時間・十七時～二十時十分迄
三、場所　十四日～二十日　体育館　二十七日二十八日　第二診療所

〔注〕未受診者には通学、学割証明書を発行しない。

奨学生募集について

本学には、関大奨学金、日本育英会、その他地方自治体、法人などの各種の奨学金制度がある。三九年度は、全体として志願者七〇～八〇％の人が採用されている。四〇年度の募集案内は、有隣館学生部掲示板に掲示しているので、希望者は、よく注意し不明な点については係に相談して下さい。特に希望者はまえもって出身校の成績証明書、戸籍謄本を各一部用意のこと。

投書

学窓を去る今……

三九卒　藤原　清

小学生のころ、ふとした大病が原因で聴覚を失った二人の青年が、今年創立八十周年を迎える母校、関大を卒業しました。一人はH君もう一人が私です。もちろん二人が大学進学を決心した動機はそれぞれ異なりますし、入学当初のH君がどういう心境であったかは私もよく知りません。しかし私自身については入学は許されたものの、聴覚器官として全く用をなさないこの耳を持って、これからの四年間果して、どれほどやっていけるかという大きな不安がいつも身についてまわっていた事が思い出されます。

このような不利な条件下にあっても尚、大学進学を望む理由の一つは、聞こえないからこそ、より一層の勉強をしておきたいからであることがあげられます。伝統ある関大に聴力障害者が入学したのは、私達を以って最初とすると聞かされた時、私は後に続く者への一種の責任感を覚えたものです。関大における一つのテスト・ケースとして、是非最後まで頑張らねば……何くそ負けるものかというのが私の心境でした。この心境は四年後の今、曲がりなりにも一応結実したのです。二人そろって卒業できた今、後に続く者に対して関大に少なくとも一つの良い前例を残せ得たことをうれしく思います。

総合大学たる、母校関大にはさまざまな学生がおり、それぞれ多様な悩みを持っておられることでしょう。そのためにせっかくの学業を途中で放棄せざるを得ない人も少なくないと思われます。それがもし、身体的、精神的なものならば、私たちのような学生もいたということを思い出すことによってあるいは立ち直っていただければと思う次第です。

ジギルとハイドではない
いつもイカスマンだ！
★髪のためによい植物性
丹頂チック
丹頂株式会社

御休憩・御食事は
佐伯食堂
ぜひ皆様の学内食堂へ

完全なサービスのあなたの店
学生証持参の方に限り
全商品２割引のサービス！
貴金属・時計とメガネの店
関大正門通
市川時計店
TEL 351－9064